「のこぎり二」で開かれた二つの祝祭

(断章"ノコギリヤネのある風景"番外編)





▲ 国際芸術祭「あいち 2022」(一宮から篭屋へ)

蒸し暑さの続く8月末、国際芸術祭「あいち 2022」の一宮会場の一つである豊島記念資料館で遠藤薫氏の展示を鑑賞した。室内空間という制約はあるが、大きなパラシュートの舞う星空の構想力に目を奪われた。

駅前商店街では、「あいち 2022」のパートナーシップ事業として、地元高校生らによる「いちのみや芸術商店街」(8/10~10/10)が開催されていた。若者の意欲とアイデアが継続的に関与することで、「シャッター商店街」が開くきっかけになればと密かに期待している。

その後、周辺の会場を駆け足でめぐり、私の工房のある「のこぎり二」に移動した。ここには、塩田千春氏の作品が展示されている。この日、「あいち 2022」と直接の関連はないアーティストの北條知子氏による Texere (9/3 ~10/10) の作品が搬入される日と重なった。ニューヨークにも拠点を持つアートスペース「mhproject」の主催するアートイベントである。

主催の異なる二つのアートイベントの同時進行が、のこぎり二に不思議な緊張感を生み出す。国際芸術祭というメインストリームの傍で展開されるmhproject の小さなブースで企画されたサウンドインスタレーション。

初日の 9 月 3 日、夕刻に始まった二人のアーティストによるサウンドパフォーマンスは、「のこぎり二」に「新たな日常」の始まりを予感させるイベントとなった。

ノコギリアン (神奈川県藤沢市在住/のこぎり二でノコギリアン・コウバを主宰)

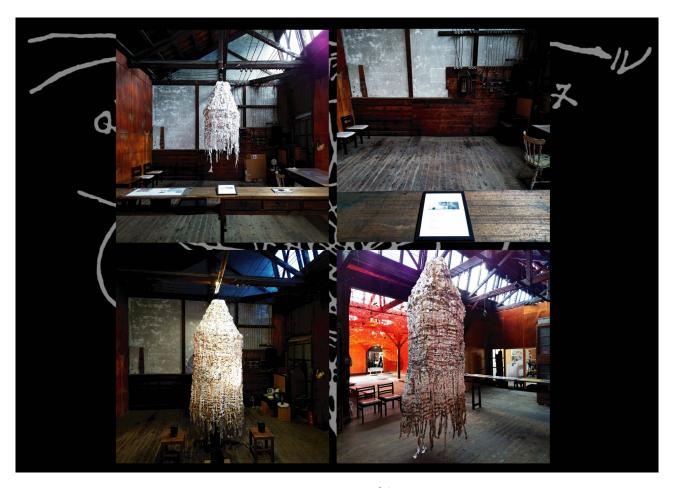
●0825 の日常:「のこぎり二」というコミュニティ

「のこぎり二」に隣接する母屋の一角、窓際に架けられたネットにひょうたんが実を結んでいる。ここで工房を営む陶芸作家が育てている。その窓の前、のこぎり二の最古参、A さんと歓談していると、窓を開けて作家さんが声を掛けてくる。「根っこの近くが腐りかけているみたい。どうすればいいかしら」。そこに一人の青年、のこぎり二に進出した米粉 100% 団子のお店の junia が加わる。若いながら農業の実経験を踏まえた貴重なアドバイスに軒先の会話が弾む。

「のこぎり二」の mhproject のブースで、翌月3日から始まる展示会の設営作業が始まった。 人目に付きやすい場所、設営作業のもの珍しさを加わって、多くの人が足を止める。作業を手伝 う人、新たに面識を得て話し込む人たち。私自身、mhproject の主宰者である H さん、小学生な がらここで図書館を構える Y くんとの初めての顔合せとなった。

現在、「のこぎり二」には、山田図書館、ハルノホリディズ、ノコギリアン・コウバ、二坪の 眼、尾州織物、Sampotoki、サカオ・ケンジ、mhproject のブースの他、Lantern Camp Shop、 camino の二つのお店、そして別棟には陶芸工房とゆたかふぇが入っている。オーナーファミリー を含めれば構成員数は 13。老若男女の入り混じる「のこぎり二長屋」である。

mhproject は、「あいち 2022」の展示エリアに隣接する位置にある。小さなコミュニティに舞い降りた「あいち 2022」の大きなイベントが、「境界」の存在を意識させる。そして、北條氏の持ち込んだオブジェが生命を吹き込まれ、音を発し、動き出す。



▲ mhproject による「境界」

●0903「のこぎり二」のオニから聞いた話 ① サウンドインスタレーション: 北條知子

オレは「のこぎり二」に棲むオニである。オレに見えるものが人間には見えないことがあるようだ。その日、「のこぎり二」で起きたこと、オレが見たことを教えてやろう。

そのアーティストが持ち込んだモノは、釣鐘のような形状をしており、言葉が書かれた短冊で網目状に構成されていた。短冊に書かれた言葉に「いのち」が宿ったのだろうか。それは、制作者の意図を超えて、進化していったのかもしれない。この「のこぎり二」の中で。

釣鐘の中から縄文琴の音が響く。この地域がまだ海であった時代を思い起こさせる。古代から 人間は織物を紡いできた。その多くは女性の手によるものだった。ある時は、織姫ともてはや された。オレはずっと見てきた。言葉と現実の間に存在するものを。

「ウツホ (空洞)」の中で、琴の音が風を起こし、釣鐘を解きほぐしてゆく。そして、言葉が宙にさまよい始めた。暑さの中で汗が滲み出し、言葉が身体にまとわりつく。やがて言葉は体内に浸透し、血液とともに身体全体を巡り始める。そして、ウチから湧き上がるものがある。

「ガチャマンの呪縛」という言葉が聞こえた。いまだに、一時の繁栄の中に多くのものが仕舞い込まれている。生きていく上で大切な何かを。そろそろ、土地も人もその呪縛から解放される頃だろう。オレが見たのはその可能性だ。ウチから音を発するということによって、ウチから開いていくということ。この「ウツホ/からっぽ」から発する音によって。



▲ 音が言葉を解き放つ

●0903「のこぎり二」のオニから聞いた話 ② サウンドパフォーマンス:恩田晃

「のこぎり二」に一人の祭司が召喚された。西洋のベルを携えて。それは、「広場」から始まった。広場では、多くの出会い、別れがあり、旅立ちがある。彼はソトに出た。一行が続く。ソトは闇だ。オレは閃光と雷鳴で迎えた。やがて周りが見えてくる。ウチでは見えないもの、聞いたことがないものと出会う。そして時が過ぎ、ウチに帰る。今度は工房エリアを巡行する。小さなコミュニティの中を歩いていく。ベルの音に大地は目覚め、初めて訪れた者も、身体から大地の記憶を受け取る。やがて、例の釣鐘の前で立ち止まる。その前に小さなベルが並べられていく。その数は奇しくも13。そこで、コミュニティが祝福される。

そして、おもむろに二つのベルとともに、彼は「境界」を超えて行った。そこは、大きな力を 鼓舞する祝祭の場。しかし、彼はひるむことはない。こちらとそちらに違いはない。そうだ、 ここは「のこぎり二」だ。だが、彼に続く者はいない。そこに「境界」を見てしまったのかも しれない。しかし、境界に踏み込むことで、開くことができるのかもしれない。例えば、呪縛 を解くために。

時間が流れ、再び、広場に戻ってきた。「ウツホ/からっぽ」の伽藍に響き渡るベルの音に、記憶が再び呼び覚まされる。祝祭は終わり、また日常が始まるのだ。「のこぎり二」の新たな日常が。これが、オレの見たことだ。さて、オマエには、何が見えた?



▲ 巡行による大地の記憶の回復

●大きな祭のあとの「のこぎり二」の新たな日常

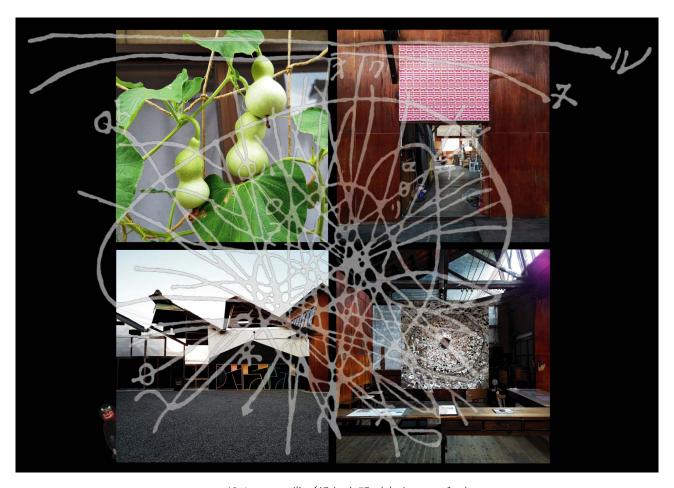
バスを待つ時間がもどかしく、駅に向かって歩き始めた。雨は上がっていた。歩くことで、少し 平静を取り戻したが、帰りの新幹線に引きずっていた。あの時と同じだ。6年前、初めて「のこぎ り二」を訪れ、「のこ座」に臨席した日のこと。その時、起きたことは、そこでしかあり得ないこと だった。「のこぎり二」だから起きたことだった。

だから、「のこぎり二」に棲むオニに聞いてみた。その夜に起きたこと、見たことを。「あいち 2022」は、外から降ってきた大きな祭りであるが、一過性である。小さなローカルコミュニティ が日常の秩序を回復するための祝祭が必要であった。機織り唄の釣鐘と西洋のベル。それは「ウッホ」から音を発するもの。ソトからの力ではなく、ウチから生まれる日常の力。新たな開き方の可能性を見たように思う。「のこぎり二」の第二幕の始まりである。

工房の軒先で、ひょうたんをめぐって会話が交わされる「のこぎり二」の日常。ひょうたんの果肉は毒性を持つが、からっぽ(ウツホ)にしたひょうたんは優れものである。容器としては、多孔質の表面が気化熱を奪い中身を気温より低く保つそうだ。楽器としての利用価値もある。

mhproject も「ウツホ」である。ここはニューヨークにつながっている。小さなコミュニティが世界につながる日常。「ウツホ」の「のこぎり二」は、迷い人の未来を変える力を持つ。「のこぎり二」を南方マンダラの「萃点」に見立てたわが妄想は、ひょうたんから駒の様相を呈してきた。

2022.9.21 (白露・玄鳥去/はくろ・つばめさる)



のこぎり二の日常/縁起空間(南方マンダラ)